

Seesaws

2025. 9.11 THU — 9.23 TUE

11:00-18:00 (LAST DAY 17:00) FREE ENTRY



出展アーティスト / 敬称略・順不同

Anais-Karenin

平野 真美

碓井 ゆい

藤瀬 朱里

薄久保 香

松本 千里

遠藤 文香

Mona Sugata

木村 亜津

門馬 さくら

清川 あさみ

山崎 萌子

小林 万里子

山田 愛

スクリプカリウ落合 安奈

YU SORA

鈴木 初音

Yuri Iwamoto

竹村 京

ゲストキュレーター | 板橋 令子

WHAT
CAFE

Seesaws ごあいさつ

本展は、自然と人の関係性に新たな光を投げかける試みとして、女性アーティスト19名による植物を素材に用いた作品や、布を支持体とした表現など、多様な素材と技法の作品を紹介します。作品の背景には、まかれた種から植物が芽生え、それを食べて育った蚕や羊から糸が紡がれ、紡がれた糸で裁縫が施されるなど、自然の循環と人の営みが連続する過程を見出すことができます。自然との関わりを見つめおすことは、自らの存在の基盤に想いを馳せ、現代社会でどのように生きるかという根源的な問いに向き合う行為でもあります。タイトルの「Seesaws(シーソーズ)」は、ゆれ動く時代に変化する価値観のバランスを象徴すると同時に、「She saw(彼女は見た)」という響きを内包し、作家それぞれの視点を示唆しています。

歴史的に、自然と人とのあいだにある感受性や献身性——たとえば「生きものへの慈しみ」や「ほつれを丁寧に縫い直す手つき」——は、しばしば女性と結びつけて語られてきました。これらの概念は、性別に対して社会的に与えられた役割が内面化され、無意識のうちに身体的・感情的な領域にまで浸透した結果のひとつとも考えられます。その一方で、こうした営みや価値観を単に「女性らしさ」として一括りにするのではなく、むしろ私たちの文化の中において個人の経験を通じて培われた感性や価値の表れとして理解することができるのではないのでしょうか。それは個人が過ごしてきた時間の中で培われた感性や価値の証でもあり、ジェンダーという枠組みだけでは語りきれない「自分らしさ」を示すものと捉えられます。

本展では、絵画、写真、映像、ガラス、テキスタイル(刺繍、染、織)、インスタレーションなど、独自のキャリアや背景を持った作家による、さまざまな手法や形態の作品を展示します。各個人のナラティブのもと自然を慈しみ、他者を慮(おもひ)べか)ること。個性ゆたかな作品群と楽しみながら向き合う時間を提供することで、既存の規範に縛られない「らしさ」を思考し、現代美術を通した他者理解や自己肯定の機会となることを目指します。

最後に、本展の開催にあたりご協力を賜りましたすべての方に、厚くお礼を申し上げます。

ゲストキュレーター 板橋 令子

インディペンデント・キュレーター。

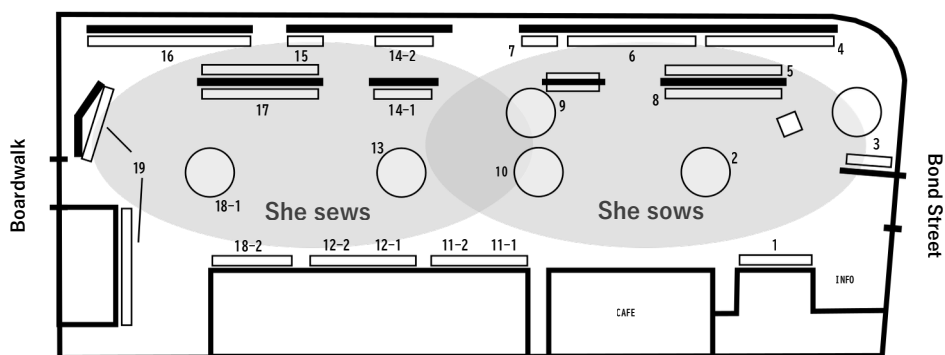
文化・芸術を生み出す持続的な街づくりがしたいという想いから、東京の企業に入社。大型インスタレーションやアートイベントの企画、新規の文化施設の立上げに携わり、2023年にはアシスタントプロデューサーとしてTOKYO NODE「蜷川実花展 Eternity in a Moment」を開催。

個人の活動では、MEET YOUR ART「ネクスト・キュレーターズ・コンペティション 2021」受賞。

主な展覧会として、南條史生が代表を務めるエヌ・アンド・エーのN&A ART SITEにて自然と女性の関係性を題材にした「Mother Nature」、T2 Collectionの特別展示「Terroir」、WHAT CAFE「Emerging Directors & Curators U40」におけるシシヤマザキ「promising everyone」などを開催。その他、登壇や寄稿に取組み、目[mé]を迎えたトークなどの実績がある。

Floor Plan

本展は、「Seesaws(シーソーズ)」の日本的な発音にことばあそびの要素を取り入れ、Bond Street側からBoardwalk側にかけて、「She sows(彼女は種をまく)」から「She sews(彼女は縫う)」へとゆるやかに重なり合い移行するレイアウト構成としています。「She sows(彼女は種をまく)」では、植物や石など自然由来の素材を用いたり題材とした作品群を、「She sews(彼女は縫う)」では布や糸を用いたり縫う行為を含んだ作品群を展示しています。前述の通りこれらは当然に繋がりが有機的に影響し合っています。作品同士の共通項を発見しながら鑑賞することで、自然の循環と人の営みが連続する過程を見出すことができます。



She sows (種をまく)

1 薄久保 香

《Forgotten Verses リングとりんご》

現実と非現実、可視と不可視との間に浮かび上がるイメージを、具象絵画のメソッドで立ち上がらせる薄久保香。本シリーズは、置き去りにされた日用品や果実、偶然にも私のもとに巡ってきたものなど、忘れられた時間の中にそっと残されていたモチーフを描いた静物画からはじまる。本作は、それらを「分析的コラージュ」としてとらえ、構築と脱構築のプロセスを同時に立ち上げながら、断片と断片のあいだに新たな関係や風景をひらいていく作品。



2 Yuri Iwamoto

《pear / pair》

生き物のように動く熱いガラスのエネルギーや“意思”を留めるように造形するYuri Iwamoto。「ここに命がある」という喜びを歌っていくような作品を目指している。副題をpartnershipと名付けられた本作は、梨を人の体に見立ててお互いに関わり合う様子を表現している。



3 Anais-Karenin

《木の中 石の葉っぱ2》

植民地時代以前から伝わる知識体系を研究し、植物との親密な関わりを通して植物と人間との関係性を問い直すアーティスト、アナイス・カレニン。本作品は、植物と石の交錯する関係が文化や地域の記憶とともに歩む姿を映し出し、杉と土壌の生態との繋がりを描いている。



《網の上の蜘蛛》

生命を題材として、ドローイング、彫刻、インスタレーション、映像など、多様な表現を用いて制作する木村亜津。本展では主に、身近なジョロウグモの巣に引っかかった無用なものを取り除く習性に着目し、蜘蛛の知覚世界と、私たちの認識世界が交差する瞬間から着想を得た作品シリーズを展開。



《蜘蛛の巣》

自ら育てた植物や身のまわりにある自然の材料を用いた作品を制作する鈴木初音。自然の世界に自分から手を伸ばしてこちらから触れていくことをテーマにしていたが、ある日の大きな蜘蛛の巣に引っかかるという出来事を通し、自然が、向こうから触れてくることで自身の外郭を認識する面白さを感じて制作された新境地の一作。

本作は岐阜の菊芋畑の菊芋で紙を作り、その地域の野草や出会った人々の家の庭の植物の種を漉き込み、ハンダゴテで焦がして絵を描いている。



《lonan ルナン 舟》

山崎萌子は、土地に自生するものに着目しながら、沖縄の伝統的な琉球紙の技法を用い、平面・立体・インスタレーションの作品を展開。本展では、台湾と与那国で制作したシリーズ「泛海」より5作品を出展。

台湾と与那国は姉妹都市として四十年以上の交流があり、戦後しばらく、四百人程の台湾人が与那国に住んでいたこともあり、顔つきや体つき、言葉や食習慣など、二つの島には近い要素を感じられる。

本作は、与那国と最も近い距離にある台湾花蓮市の織物工房でバナナの繊維を採取。その台湾のバナナ繊維と与那国の糸芭蕉の繊維を混ぜ、台湾の手練りの墨で染め、紙を漉いた。その紙に台湾と与那国で撮影した写真が印刷されている。



7

平野 真美

《蘇生するユニコーン Lesson 4 皮膚》

想像上の生物であるユニコーンの実在化を試み、骨格・内臓・筋肉・皮膚などを緻密に制作、肺と心臓に生命維持装置をつなぎ、まるで生命を宿したかのような存在として出現させる平野真美のプロジェクト《蘇生するユニコーン》。

本作はその設計図であり、トレーシングペーパーの裏面に骨格、表面に表皮が描かれている。



8

遠藤 文香

《untitled (stone #2)》

アニミズム的な自然観をテーマに写真を制作する遠藤文香。デジタル加工をすることで自然と人為の境界線を曖昧にしたアプローチが、異世界を見ているかのような印象的なイメージをつくり出す。

本シリーズは北海道のアイヌ由来の地域で撮影されており、人間を含め、自然界に存在するもの全てに魂が宿するという考えをもとに、超越した存在を感じさせる。



9

山田 愛

《円相 No.28》

石材店に生まれ育ち、石を磨いて本来の美しさを取り戻すことや、石を在るべき処へ据えることを、制作の中心としている山田愛。

「円相」シリーズは、お墓の聖地に敷かれた玉砂利を使用し、土や埃など長年の蓄積で染み付いた汚れを落とすため、丁寧に何度も洗い、一粒ずつ拭いて磨く。そして美しさを取り戻した石を、セメントを流した画面に無心で円形に据えていくことで完成する。その際の、制御しきれない微細な心身の動きが、円の模様として表れている作品。



10 Mona Sugata

いのちを繋いでいく営みの強さや美しさを、花や葉を組み合わせてシンボリックに表現するMona Sugata。

ヨーロッパの服飾文化に見られる伝統的なコテを使って制作する布花は、有機的なフォルムと独特の表情、それらを組み合わせて展示空間に広がる奇妙な生命感をもつ。手作業で生み出す草花からなる「生命の樹」は、『地に根差し、あらゆるものと繋がり、身を結び、喜びを感じ、それを繰り返し拡大してゆく』ことを象徴している。



11 清川 あさみ

11-1 《をさなめ》

写真や本といった平面に、糸やビーズで刺繍を施す手法で、絵画、音楽、文学のポエジーを生み出す清川あさみ。歴史あるものを解釈し直し復興するプロジェクトより、平安時代に貴族の遊びとして行われてきた「貝合わせ」に着想を得て、現代に生きる人物をモチーフに再構築された本作。

「貝合わせ」は一对の貝を合わせる遊びだが、本作では一枚の貝の内側に人物像が収められ、必ず揃うわけではなく、ずれや空白も組み合わせの一部として存在する、といういつの時代でも人生の選択枝は幾重にも重なり合っていることを表現している。



11-2 《愛の夢(仏版)》

清川が所有する本や楽譜のページに刺繍でドローイングを施した「わたしたちのおはなし」シリーズは、文字や音符に付随するそれぞれの過去の記憶をひとつずつ編み込むように物語の糸が紡がれ、見る人それぞれの中でもうひとつの物語へと変化していく。



12-1 《Danae》

写真や描かれたドローイングの上に刺繍を施した布を重ねた平面のインスタレーションを制作している竹村京。ダナエの上空から金貨が降り注ぐ様子が描かれているヴェネツィリオの絵画の構図を下敷きにしつつ、竹村自身の日々の記憶から取り出されたものごとによって描かれた本作は、画面の中央に位置するカメオが原画を暗示する役割を果たしている。カメオは貝殻を用いた装飾品であり、貝殻は歴史上通貨として用いられたこともあった。原画に描かれた金貨にどのような装飾が施されているのか—そのように想像してみると、ダナエに降り注ぐ金貨も新たな意味を与えられる。



12-2 《Renovated: H.T.'s mocha cup》

既に存在しないものや記憶のかげらをより具体的な存在へと昇華させる作品として、本展では壊れてしまった食器を用いた「修復シリーズ」を出展。本作は、壊れた日用品を接着材で仮止めし、白に光る絹糸で縫うことにより傷口に光を与え、あらたに美しい状態として蘇らせている。



《SHISEI》

刺繍を装飾ではなく「痕跡」を残す行為と捉え、立体作品を制作している門馬さくら。

江戸時代の刺青は、単なる装飾ではなく、自らの勇敢さや覚悟を示す行為だった。本作はその歴史的背景と精神性に着目し、刺青という行為の意味を現代に問い直している。正面から見ると模様は見えないが、光を当てると影として浮世絵の模様が浮かび上がる。能や刺青、甲冑など日本の伝統文化に根ざした、「隠すことで露わにする」美意識が制作の核となっている。



14 スクリプカリウ落合 安奈

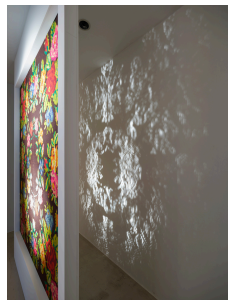
14-1 《明滅する輪郭 / Outline to Flicker》

日本とルーマニアの 2 つの母国に根を下ろす方法の模索をきっかけに、「土地と人の結びつき」というテーマを持ち、マルチメディアな作品を制作するスクリプカリウ落合。2015年から制作している「明滅する輪郭」シリーズの新作。日本とルーマニアで収集した名も知らぬ人々の写真にビニール袋が縫い付けられ、「呼吸」が可視化される。呼吸によって自己と他者を行き交う成分からは、生きる時代も土地も民族も異なる人のその一部が、今の一呼吸によってあなたの一部になる可能性を示唆し、そこから浮かび上がるある種の共通するものを表現している。



14-2 《光を紡ぐひと / The Weaver of Light》

かつてルーマニアでは、女性が伝統的な技法で絨毯を織り上げ、家の壁を彩ると同時に、女性の器量の良さを見定めるものとしての機能もあった。その編目の繊細な隙間から漏れた無数の光の粒が、作り手の痕跡のようにその女性の肖像としての揺らぎを写し出す。



15 碓井 ゆい

《ミセス・ワタナベの夢と絶望》

身の回りの素材や手芸の技法で、社会制度や歴史についての批評や考察を作品を通して表現する碓井ゆい。「ミセス・ワタナベ」とは、2000年前後から欧米の経済誌で使われるようになった、FXを行う日本の個人投資家を意味する造語である。女性が家計管理を担うという伝統的慣習から、ミセスと呼ばれた「経済大国」の女性が、長く続く低い金利や上がらない給料、そして非正規雇用で「取引する時間がとりやすい」ことを背景に、静かにパソコン画面を見つめる—そんな「失われたn年」のひとつの姿を思い浮かべ制作された。



《一緒に暮らすこと》

見落とされがちな日常の風景や些細な記憶をテーマに、白く柔らかい布に黒い糸で刺繍を施した作品を発表しているYU SORA。

日常生活の姿を描いた紙を布とワタに重ねてミシンで写し、紙だけを剥がして、糸の処理や手刺繍で仕上げていく工程は、瞬間を繰り返し描くことで、過ぎていく時間を止めたい、忘れたくないという願いが感じられる。

本作は、新しい家族を迎え、部屋に置かれたぬいぐるみたちの姿をとらえたものだ。日常の風景の一つだが、自身の幼少期に親も目にしていた風景でもあり、世代を通して人生の中で繰り返すことについても考えている。



《空へゆく、海へゆく》

織る、染める、編む、刺す、といったテキスタイル技法を用い多様な素材を組み合わせていく方法で、世界に存在する様々な結びつきを表現する小林万里子。人と動物を分ける境界線としての肉体が土へと還る長い時間や、死してから他の生き物として命が再生する道のりを描くといったように、我々が「人」として生きる「今」という時間を繙きながら制作を行っている。

本作は、空と海を舞台に生命の躍動と自然の循環を表現したテキスタイル作品。作品の下方に泳ぐ魚と上空を舞う鳥は、それぞれ異なる環境に生息しながらも、画面を貫く水の流れによって有機的に結ばれた存在として表現されている。

中央部に勢いよく伸びる水草や、両端に配された白い果実を結ぶ繊細な枝振りもまた、水という生命の糧を得て輝く植物の歓喜も印象的な一作。



18-1 《存在解体のあとで》

「ラインの解体と構築」に着目しその軌跡を捕まえることで、世界を理解するための新しい言語の構築を試みている藤瀬朱里。

藤瀬は「宇宙を名詞と動詞との間で揺れ動いている膜のようなもの」として捉えており、人が形成しては絶え間なく意味の解体と構築を繰り返している物事や記憶を記号として表現している。

本作は、紙漉きの手法を応用し分解した和紙の細やかな繊維と糸を幾重にも重ね合わせて絡めていくことで、大きなテキストを織るようにして、様々な規模で解体と構築を繰り返す記号の広がりを描いている。



18-2

《Songs to Make the Dust Dance on the Beams》

アートスタジオのデスクの痕跡を刺繍によってトレースして制作された本作。

スタジオのデスクは、目に見えない創造活動の軌跡が刻印されうる稀有な場である。刺繍という手法で時間をかけてトレースすることで、創造性の痕跡の可視化を試みると同時に、汚れの価値に揺らぎを起こす。身体を用いながらも先入観をなるべく持たずに他律的に刺繍を行う手法は、科学的にも未知の多い領域である人間の創造性に対して、認識の手を伸ばしていこうとする態度でもある。



《環》

伝統的な日本の絞り染め技法をもとに、模様にとどまらない立体的な表現として作品を展開する松本千里。

手絞りによって生み出された群衆は、よく見るとしわの入り方など、細かい個性があります。拮抗や同調をし、何か話し込んでいたり、調子によって飛び出したりとまるで群衆のよう。

円パネルを使うことで布の柔らかい伸縮性のある特長を引き出し、絞りがまるで鼓動しているように生命感を持ち、循環しているように構成されている。

